

鳥取県の観光業
—訪日外国人観光客の動向を中心に—
研究生 楊楠

I はじめに

2003年4月、政府の観光立国懇談会は「住んでよし、訪れてよしの国づくり」を基本理念として観光立国に取り組むべきだと回答し、その後、日本の観光政策は政府が一丸となって推進していく中で順調に進んでいった。(観光庁持続可能な観光推進本部 2019) ⁱ。

とりわけ、2012年以降、訪日外国人旅行者数は右肩上がりに伸び続け、2016年には2,000万人を超え、2018年は前年比8.7%増の3,119万2千人と、初めて3,000万人を超え、2019年には3,180万人(日本政府観光局 2021) ⁱⁱを超える状況に至った。2020年はコロナの影響で400万人に減ったものの、訪日外国人旅行者は国内各地に消費の拡大や雇用の誘発などの効果をもたらしており、引き続き、2030年には6,000万人等の目標を目指して全力で取り組んでいくこととしている。(サーチセンター 2018) ⁱⁱⁱ。

国連世界観光機関(UNWTO)は、持続可能な観光について「訪問客、産業、環境、受け入れ地域の需要に適合しつつ、現在と未来の環境、社会文化、経済への影響に十分配慮した観光」と定義している。持続可能な観光を実現するには、「環境」、「社会文化」、「経済」の3領域の適切なバランスが求められる。持続可能な観光といえ、観光地は避けられないと思われる。観光地に関しては、「都市型」、「歴史文化型」、「リゾート型」、「温泉型」、「自然型」五つに分類した。(観光庁持続可能な観光推進本部 2019) ^{iv}。

本稿では、まず日本の「温泉型」観光地につき、入湯客の統一的資料を作成して、その地域の温泉地の特徴、季節変化の特性と今後の訪日客数の推計からの予想を明らかにする。

温泉観光地とは温泉を提供する宿泊施設等や温泉街を主な観光資源とする地域である。温泉地全般のアピールポイントは、自然に関する「季節」、「山」、「自然観光」や「宿泊施設」といったものがあるながらも、社会背景や観光動向の影響を受けながら時代ごとに変化することが示された(津田・十代田・津々見. 2011)。日本温泉観光地に関する検討した研究では、温泉観光地の地域的展開を詳しく調べ、入湯客の地域的特性や温泉観光地のローカル化と入湯客の季節的特性を調べる必要があると指摘されている(山村. 1980)。宿泊施設の経営戦略に着目した福井(2014)は、群馬県草津温泉の宿泊業におけるネット利用の導入状況は段階間・施設間で不均質で、情報通信技術の普及と個人旅行化が盛んである現状を示した。鶴田(2000)はホテルの立地に関して理論的に検討した結果、距離、人口規模と観光資源とがホテルの稼働率を規定する要因となっていることが確認した。宮城(2015)はホスピタリティ産業の形成過程における歴史的変遷、並びに外部環境におけるサービス・コンセプトの変化の視点の必要性について指摘した。

近年では、公共交通期間が未整備でも自動車交通による利便性が高い地方都市において、観光客が増えた都市が増加している(小林・十代田・津々見. 2019)。

そこで、今回の調査では、対象地域において、いかなる地域から観光客を吸収しているのか、また、日帰りと宿泊旅行の旅行消費額の違いを明らかにしたうえで、温泉観光地の年間の入湯客の動向を明らかにする。その上で季節的な変化を明らかにし、日本全体の訪日推計結果をまとめ、その温泉観光地と対象地域の今後の観光振興事業を考えてみたい。

(1) 研究対象地域・目的

皆生温泉は鳥取県西部唯一の温泉宿泊地で、山陰最大級の温泉地でもあるが、入湯客数は1993年の約75万人をピークに2019年には約40万人で推移している。このような状況の皆生温泉の復活が鳥取県西部エリアの観光産業振興に果たす役割は少ない。

このため、皆生温泉エリア全体の魅力向上を目指して、皆生温泉まちづくり会議、皆生温泉旅館組合が2019年に「皆生温泉まちづくりビジョン」を基づき、「海遊リゾート皆生温泉」をコンセプトとして定めた。

さらに、2020年度はコロナの影響で、多くの事業が実施できない状況もあるが、皆生温泉が温泉地として開発されてから、100周年を迎えることから、記念事業を実施し、皆生温泉の知名度を向上させ、宿泊者数の復活を目指していた。これまで米子市観光協会は、皆生温泉の復活事業や温泉の振興事業に多くの力を入れ、多くの可能性案を計画した。

以上の点を考慮し本稿は、皆生温泉を対象地域として、この観光地で訪日外国人観光客の動向と変化を明らかにした上で、日帰り・宿泊の観光消費構成の関連性から、皆生温泉の活性化と県西部エリアの観光産業振興との関係や可能性を解明することを目的とする。

(2) 利用データと研究方法

本研究の対象地域は、鳥取県全体の観光及び県内で入湯客数最多の皆生温泉とする。本研究では概ね観光客入込動態調査結果を参考にして、図表を作成した。なお、2020～2021年はコロナで、世界のインパウンド市場に影響が出たという特殊性があり、訪日客数動向のデータが普遍的ではない。このため、2019年時点までを分析対象にした。Ⅱ章では文献資料を用いて訪問目的や観光客数などの鳥取県の観光特性に関わる出来事を把握する。Ⅲ章では観光動向の資料を用いて観光客が多く利用する温泉地に注目することで、皆生温泉の訪日客数及び入湯客数の月別変化からその温泉地変容について考察を行う。また、日本の2030年までの訪日客数の推計結果を踏まえ、皆生温泉と鳥取県の今後の観光振興事業の役割を明らかにする。

Ⅱ 鳥取県の観光業について

鳥取県の皆生温泉を中心とした観光について述べる前に、鳥取県全体の観光の特徴をいくつか図表を提示して述べたい。表1によると、鳥取県の訪問者数は都道府県(47区分)別で第45位であり、訪問意向は全国平均を大きく下回っている。表1と表2によって、「観光(自然、温泉)目的」の訪問者数は400万人、「全目的」訪問者数の72%以上を占める。逆に、図1によると、鳥取県へイベントに参加と仕事による来訪者の割合は合わせて1.3%となる。つま

り、鳥取県にはビジネス目的の訪問者がほとんどいなく、観光業は鳥取県内で特に盛んな産業と考えられる。

図2は、鳥取県に関する主な情報入手経路を示したものである。「テレビ番組」(36.3%)が突出して高く主要な情報源となっており、インターネットからの情報入手は媒体ごとにばらつきがあり、SNS、動画などまんべんなく回答がある。これに対して、鳥取県の情報について、入手しやすい経路はテレビ、インターネットと言える。

次に鳥取県における日帰り旅行と宿泊旅行の実態と外国人延べ宿泊者数の推移をいくつかの図表を提示して述べたい。図3は鳥取県の観光入込客実人数及び宿泊客数を2012年から2019年までグラフにしたものである。観光入込客実人数は2012年が最多で、1145万人に達する。しかし、全体的に減少傾向にある。一方、日帰り客数と比べて、宿泊の客数が著しく少ない。図4は鳥取県の観光客の日帰り、宿泊の割合をグラフにしたものである。日帰りが概ね7-8割を占めており、宿泊の割合が2-3割を占めており、全体的に横ばいである。これらは、鳥取県観光地の魅力度は年々右肩下がり、宿泊客数は横ばいで、宿泊施設が不十分であると考えられる。

表3は2019年日帰り宿泊・費目別一人当たり観光消費額をグラフにしたものである。日帰り、宿泊旅行に関わらず、県外観光客は県内観光客より消費額が高い。宿泊旅行の消費額は日帰りの消費額をはるかに上回っている。これは、新たな体験型メニューを作成し、周遊型観光を推進し、県外観光客や宿泊客のニーズを満たすことを視点に、さらに地域内滞在時間の延長を目指すなら、鳥取県観光経済の振興は当然のことと考えられる。

表1 都道府県(47区分)別訪問者数
【全目的】(2019年)

順番	訪問地	訪問者数 (単位:万人)
1	東京都	9,077
2	大阪府	5,438
3	千葉県	4,338
4	神奈川県	3,882
5	北海道	3,678
.	.	.
.	.	.
.	.	.
43	佐賀県	770
42	徳島県	717
43	福井県	647
44	愛媛県	628
45	鳥取県	552
46	島根県	505
47	高知県	419

表2 都道府県(47区分)別訪問者数
【観光・レクリエーション目的】(2019年)

順番	訪問地	訪問者数 (単位:万人)
1	東京都	4,850
2	千葉県	3,296
3	大阪府	2,934
4	神奈川県	2,642
5	静岡県	2,520
.	.	.
.	.	.
.	.	.
41	鳥取県	400
42	福井県	394
43	愛媛県	376
44	秋田県	339
45	島根県	337
46	徳島県	326
47	高知県	218

出典：国土交通省観光庁『2019年「旅行・観光消費動向調査」』より作成

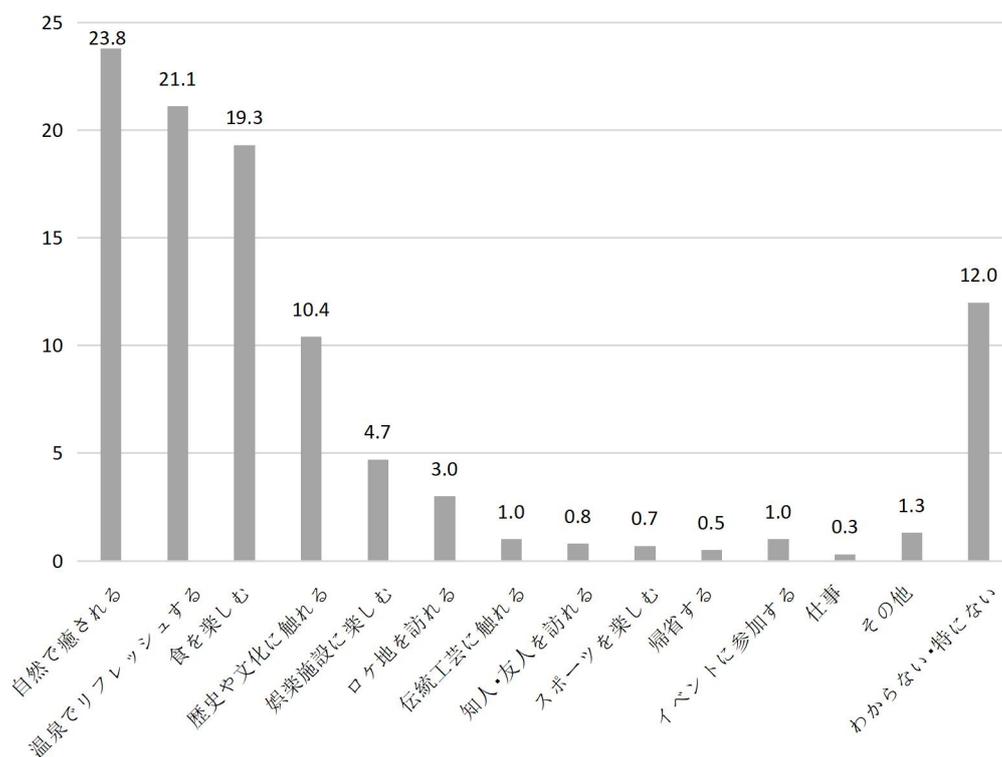


図1 鳥取県への訪問時の主要目的 [単位：%]

出典：鳥取県広報課 『令和2年度 鳥取県に関するイメージ』により作成

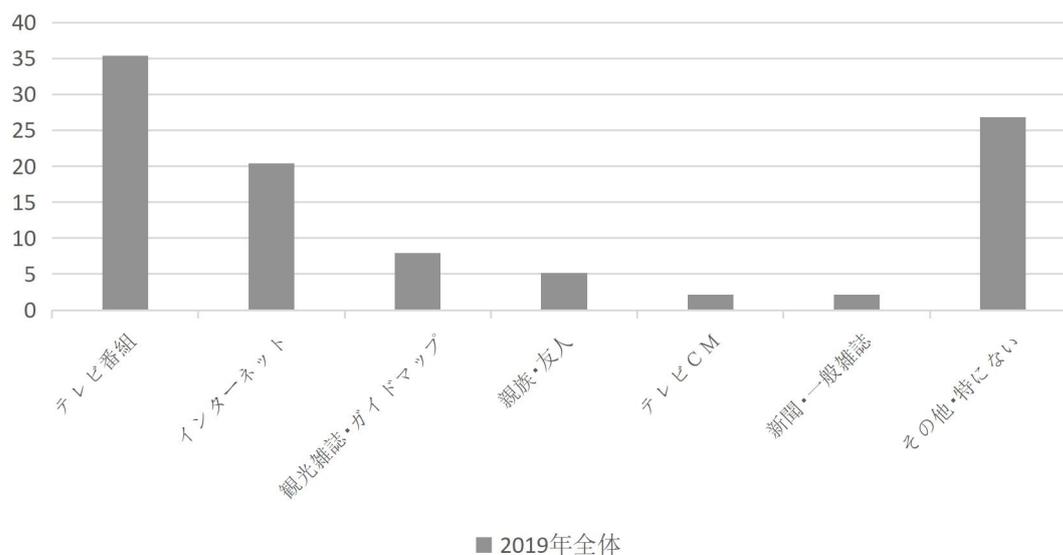


図2 鳥取県に関する主な情報入手経路 [単位：%]

出典：鳥取県広報課 『令和2年度 鳥取県に関するイメージ』により作成

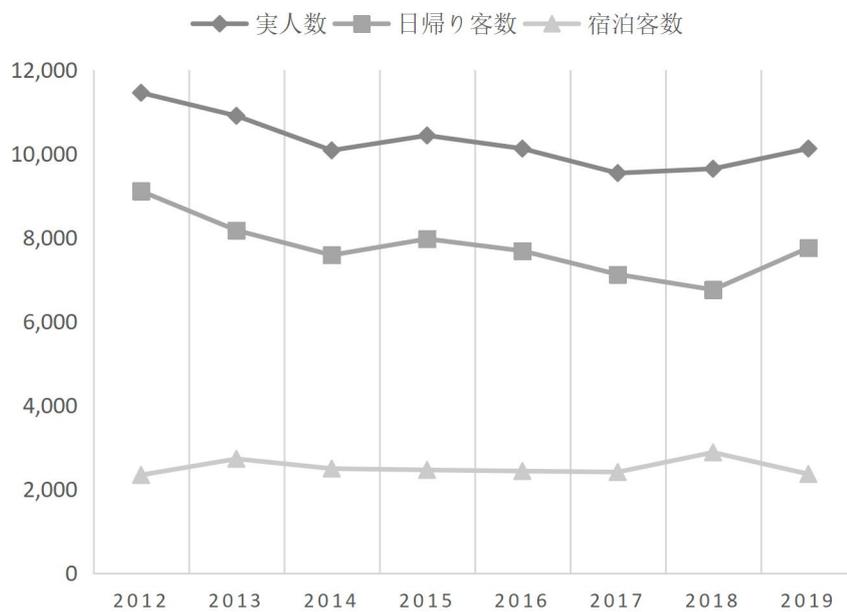


図3 鳥取県の観光入込客実人数及び宿泊客数[単位：千人]

出典：鳥取県観光交流局観光戦略課『鳥取県「観光客入込動態調査結果」』より作成

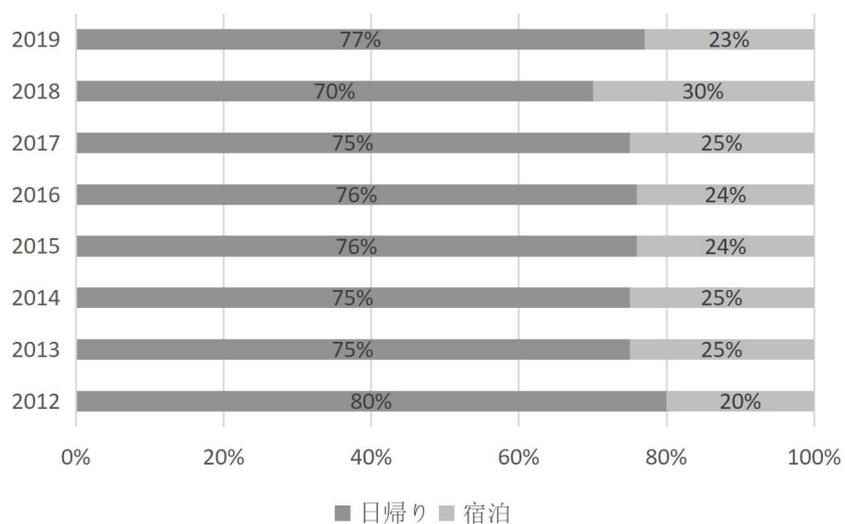


図4 鳥取県の観光客の日帰り、宿泊の割合

出典：鳥取県観光交流局観光戦略課『鳥取県「観光客入込動態調査結果」』、『観光庁「宿泊旅行統計」』より作成

区分		県外客	県内客
日帰り	交通費	823	399
	飲食費	1, 871	1, 237
	土産代等	5, 383	4, 530
合計		8, 077	6, 166
宿泊	宿泊費	15, 205	14, 242
	交通費	1, 804	899
	飲食費	4, 193	2, 526
	土産代等	7, 723	4, 933
合計		28, 925	22, 600

表3 2019年日帰り宿泊・費目別一人当たり観光消費額[単位：円]

出典：鳥取県観光交流局観光戦略課『令和元年 鳥取県「観光客入込動態調査結果」』より作成

図5は外国人延べ宿泊者数推移を2007年から2019年までグラフにしたものである。2012年3月新たな「観光立国推進基本計画」と「国際リゾートとっとりプラン（2013年4月策定）」に基づき、2012、2013年から、外国人延べ宿泊者数は著しく増加している。2018年の外国人延べ宿泊者数が最多で、194,730人に達する。つまり、「観光立国」政策の推進により、大都市はもちろん、鳥取県のような地方は外国人訪問にも大きな影響を及ぼしている。このような戦略的に海外誘客も明らかに効果があると考えられる。

図6は鳥取県の国籍・地域別外国人延べ宿泊客数を2015年から2019年までグラフにしたものである。鳥取県を訪れる外国人観光客の約8割が、東アジアや東南アジアから訪れており、約5割が韓国、香港からの送客となっている。アジア諸国・地域の急速な成長などを踏まえると、外国人観光客はさらに増加していくことが予想される。

とりわけ、図7は2019年鳥取県の国籍、地域別での構成率をグラフにしたものである。2019年の訪日観光客数を国籍、地域別にみると香港が訪問者の31%を占め、最も多く訪れており、続いて韓国が25%、台湾13%、中国12%、アメリカ3%となっており、この上位五か国で全体の84%を占めている。

それで、図6、図7をまとめると、アジア諸国が経済発展著しくなり、アプローチの深度に合わせて積極的な誘客に取り組むのが良い方法であると思われる。

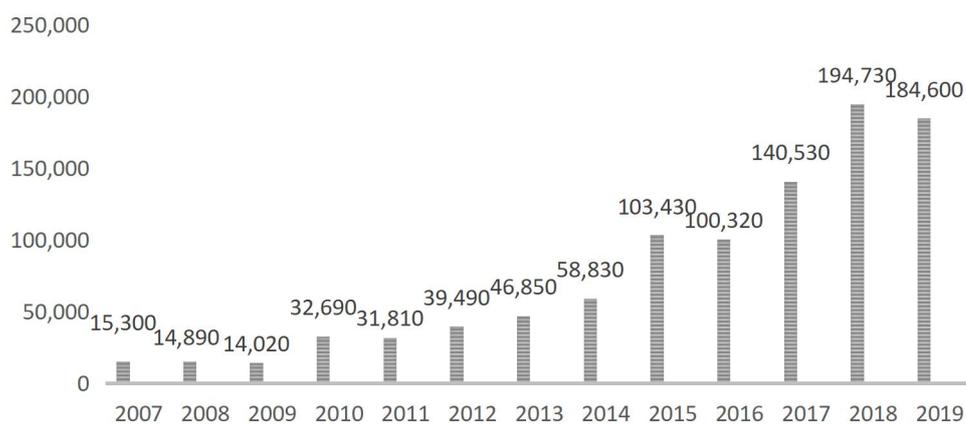


図5 外国人延べ宿泊者数推移 [単位：人]
(宿泊施設従業者数10人未満の施設を含む)

出典：鳥取県観光交流局観光戦略課『鳥取県「令和元年 観光客入込動態調査結果」』より作成

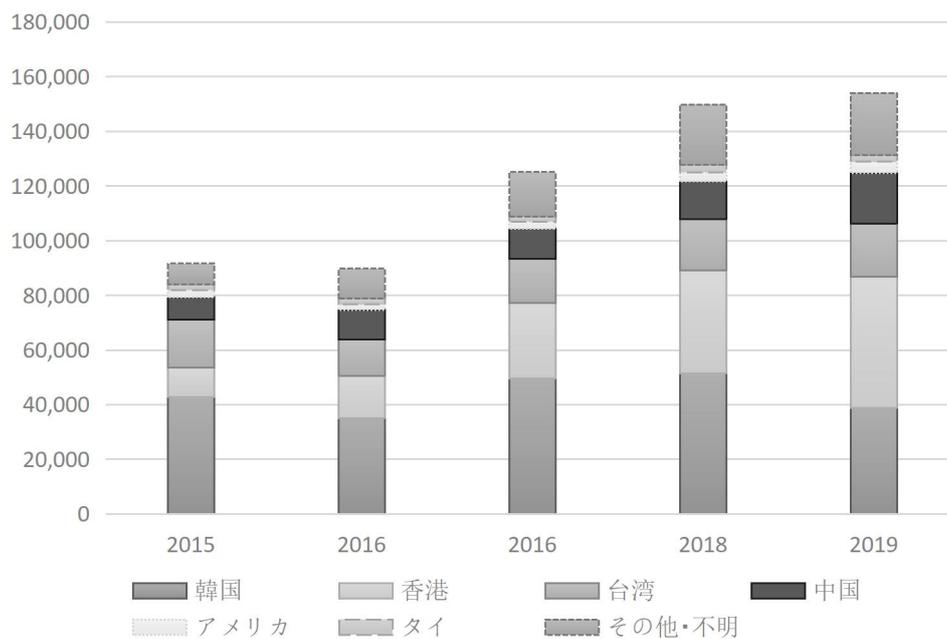


図6 鳥取県の国籍・地域別外国人延べ宿泊客数[単位：人]
(宿泊施設従業者数10人以上の施設のみ)

出典：鳥取県観光交流局観光戦略課『鳥取県「観光客入込動態調査結果」』より作成

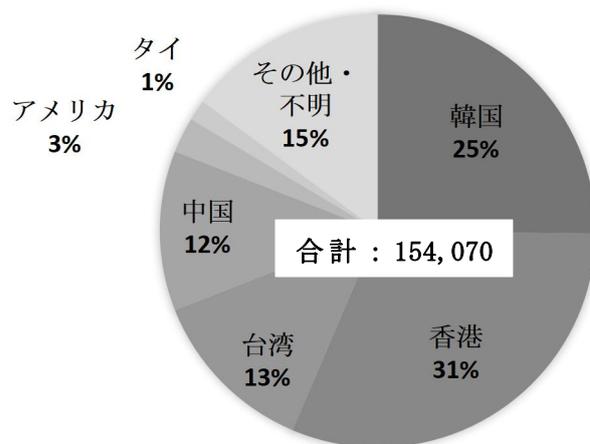


図7 2019年鳥取県の国籍、地域別での構成率

出典：鳥取県観光交流局観光戦略課『鳥取県「観光客入込動態調査結果」』より作成

Ⅲ 鳥取県における皆生温泉について

次に鳥取県における皆生温泉入湯者の特徴をいくつか図表を提示して述べたい。表4は2018年度都道府県ランキング全国魅力的な温泉をグラフにしたものである。魅力的な温泉の中で、大分県、群馬県、愛媛県、山形県はトップ4にランクする。の順番が全く変わらない。これが温泉地の個性、整備度との関係が深いと思われる。一方で、鳥取県は魅力的な温泉で都道府県ランキングのベスト10に選ばれ、県内における潜在力のある温泉地（皆生温泉、三朝温泉など）があると言える。

表4 都道府県ランキング 選んだ理由別—魅力的な温泉（2018）

2018年度 順位		
全体平均（単位：％）		34.3
1位	大分県	77.6
2位	群馬県	74.1
3位	愛媛県	62.1
4位	山形県	59.4
5位	栃木県	59.2
6位	熊本県	57.8
7位	佐賀県	57.4
8位	鳥取県	56.3
9位	静岡県	53.0
10位	岐阜県	52.6

出典：リサーチセンター『じゃらん宿泊旅行調査2019』により作成

表5は2019年鳥取県の温泉地の入湯客数を図表にしたものである。皆生温泉、三朝温泉の割合が大きく、鳥取温泉、はわい温泉と他の温泉地入湯客の割合は少ない。とりわけ、鳥取県内温泉地の入湯客数では皆生温泉が約40.3万人(38.3%)で最大の割合を占めている。これは、鳥取県内で最も活気にみちた温泉地は皆生温泉と言える。

図9は鳥取県内の各温泉地の位置である。図10は皆生温泉入湯客数推移を2010年から2020年までグラフにしたものである。図10によると、2013年の入湯客数が最多で、474,858人に達する。2013年から2019年まで、この6年間ではやや減少傾向にある。しかし、近年(～2019年)、皆生温泉の入湯客数は全体的にほとんど変わらなく、横ばいである。ただし、2020年から、コロナの影響で、全体の温泉地入湯客数も減少する。

図11は皆生温泉における訪日客宿泊者数推移を2013年から2018年までグラフにしたものである。皆生温泉における訪日客宿泊者数推移は、全体的に増加傾向にあり、2018年の皆生温泉エリアの訪日客は、3万1千人を超えており、前年比でも117%に伸長している。しかし、訪日客宿泊者数は連年増加傾向があるが、宿泊客総数に占める割合は少ない。

図12は2018年皆生温泉月別入湯客数をグラフにしたものである。月別の宿泊数から動向をみると、7月後半から8月と10月後半から11月の集客力は高い。そのほかの月では、集客が落ち込む傾向がある。これに対して、皆生温泉は一般的な温泉と同じ、季節変化の特性があると考えられる。

表5 鳥取県温泉地の入湯客数(2019年)

温泉地名	人数	構成比
皆生温泉	404,085	38.3
三朝温泉	347,330	33.0
はわい温泉	100,914	9.6
鳥取温泉	89,746	8.5
関金温泉	26,957	2.5
吉岡温泉	24,059	2.3
東郷温泉	21,445	2.0
浜村温泉	14,614	1.4
鹿野温泉	14,335	1.4
岩井温泉	10,421	1.0
合計	1,053,906	100.0

出典：鳥取県観光交流局観光戦略課『令和元年 観光客入込動態調査結果』より作成

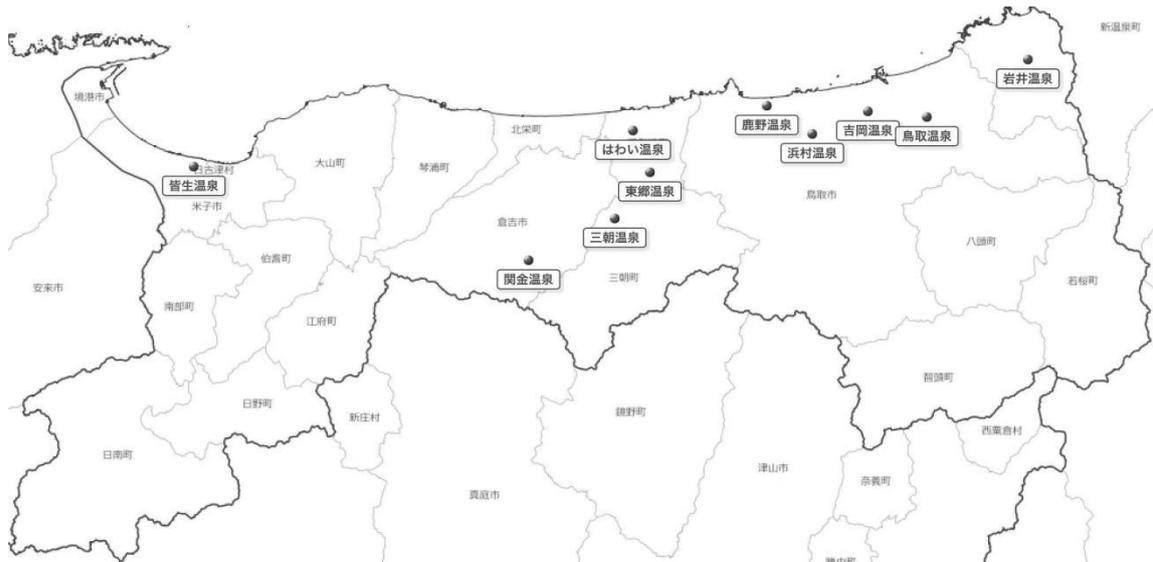


図9 鳥取県の各温泉地の位置

出典：地理院地図/GSI Maps | 国土地理院により作成

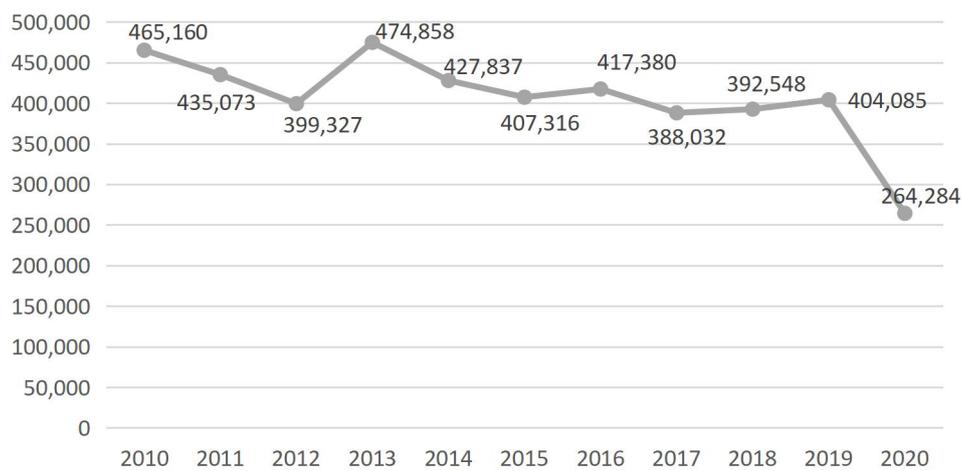


図10 皆生温泉入湯客数推移[単位：人]

出典：鳥取県観光交流局観光戦略課『主要観光施設入込客数及び温泉入湯客数』により作成

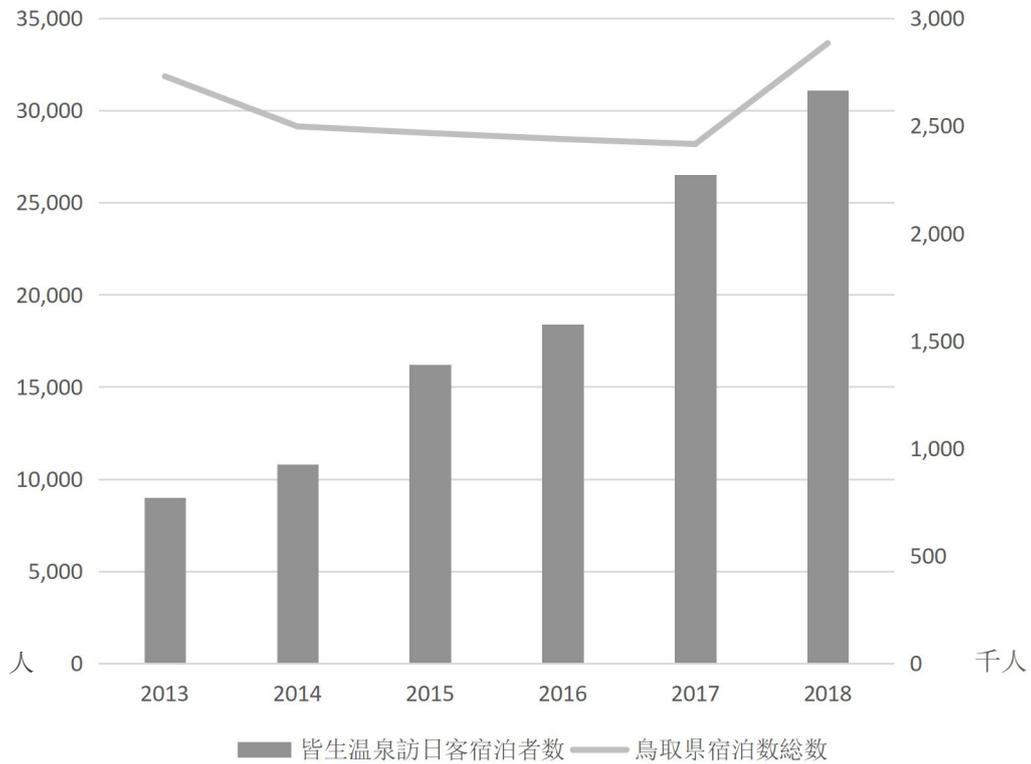


図 11 皆生温泉における訪日客宿泊者数推移 [単位：人/千人]

出典：皆生温泉まちづくりビジョン・鳥取県観光交流局「観光客入込動態調査結果」により作成

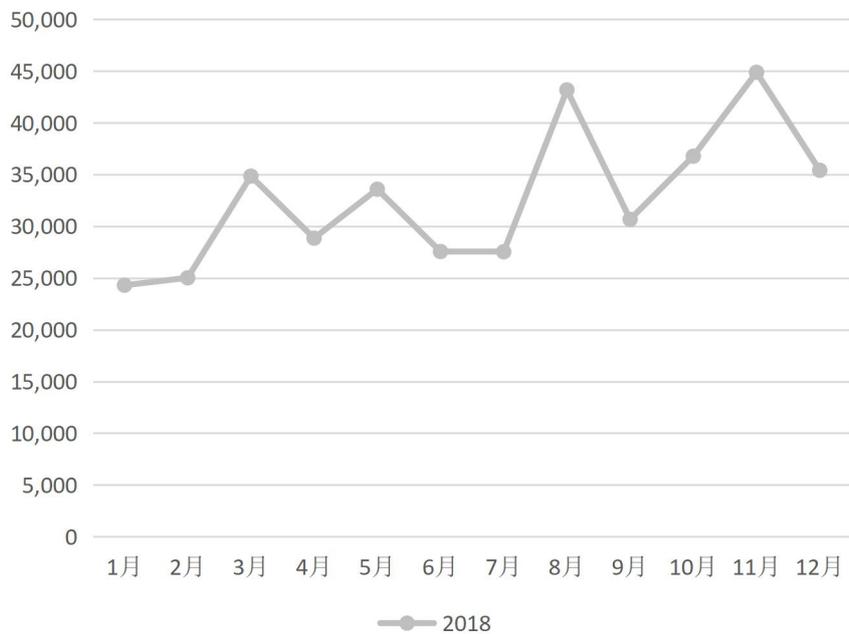


図 12 皆生温泉月別入湯客数 [単位：人]

出典：鳥取県観光交流局観光戦略課『主要観光施設入込客数及び温泉入湯客数』より作成

表 6 は日本人国内旅行者と訪日客数の経済効果比較（推計）をグラフにしたものである。経済効果によると、2030 年との比較では、訪日者の宿泊人数は国内旅行者の延べ宿泊人数より少ないが、訪日者の経済効果は国内旅行者よりはるかに高い。

図 13、図 14 は延べ観光旅行宿泊者数と延べ観光旅行宿泊数の推計を 2016 年から 2030 までを 2 つのグラフにしたものである。以下の推計により、2016 年との比較では、国内旅行者は、延べ旅行者数（21.8%減）、延べ宿泊数（25.7%減）ともに、大きく減少することを把握する。訪日客の推計により、2030 年段階では、延べ宿泊旅行者数は、日本人客が訪日客より約 2 倍多いものの、訪日は一人あたりの宿泊数が多いため、延べ宿泊数では、日本人客の 1.5 倍となることを予想する。

これらの推計に対して、国内旅行者の旅行宿泊者数と旅行宿泊数の変化が穏やかであることとの比較では、訪日者の旅行宿泊者数と旅行宿泊数は著しく向上し、特に宿泊日数の増加は宿泊施設の新規産業立地に大きく影響し、さらに観光業と宿泊業の発展を牽引すると考えられる。また、人気のある大都市は勿論、鳥取県の魅力のある皆生温泉にも良いチャンスを迎えると思われる。

表 6 日本人国内旅行者と訪日客数の経済効果比較（推計）

	日本人国内旅行者		訪日客	
	延べ宿泊者数	経済効果	延べ宿泊者数	経済効果
2016 年	1 億 4358 万人	7 兆 878 億円	2105 万人	3 兆 2631 億円
2030 年	1 億 2945 万人	6 兆 3819 億円	6045 万人	9 兆 3707 億円

出典：リサーチセンター『2030 年観光の未来需要予測研究』により作成

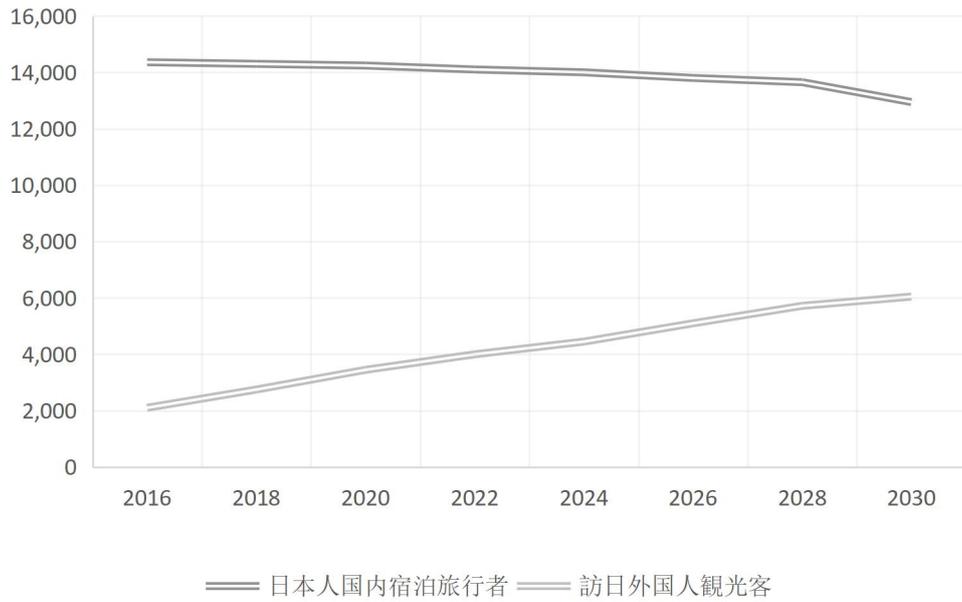


図 13 延べ観光旅行宿泊者数推計 [単位：万人]

出典：リサーチセンター『2030年観光の未来需要予測研究』により作成

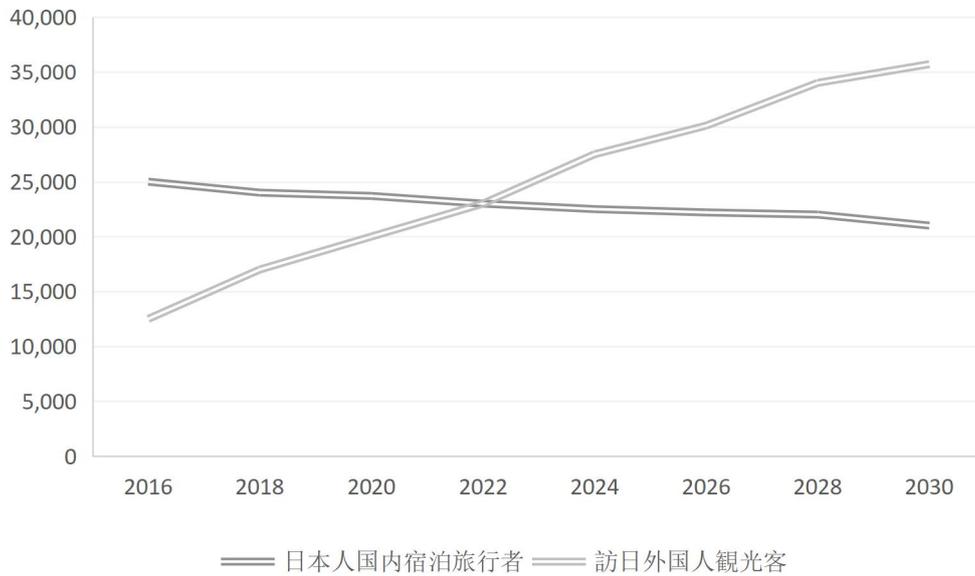


図 14 延べ観光旅行宿泊数推計 [単位：万泊]

出典：リサーチセンター『2030年観光の未来需要予測研究』により作成

IV おわりに

本稿は、まず「令和2年度鳥取県に関するイメージ調査」を用いて、鳥取県への訪問時の主要目的及び鳥取県に関する情報入手経路に注目して検討した。その結果、鳥取県には仕事目的での訪問者数は少なく、観光目的の訪問者数が最も多いことが明らかになった。また、テレビ番組、インターネット、観光雑誌・ガイドマップが鳥取県に訪問する際の主要な情報源となっており、特にテレビ番組の割合が最も多く36.3%に達することを確認することができた。

また、鳥取県の調査データである「観光客入込動態調査結果」を用いて、鳥取県における日帰り・宿泊旅行及び国籍・地域別外国人延べ宿泊客数の構成状況に注目して分析・検討した。その結果、以下の2点を確認することができた。

第一は、鳥取県への日帰り・宿泊の客数変化及び観光消費状況に特徴が見られた点である。日帰り客数と比べて、宿泊の客数が著しく少ない。観光入込客実人数は2012年に最も多く、1145万人に達し、その後は全体的に減少傾向にある。これは鳥取県観光地の魅力不足であり、宿泊施設の環境が悪いのではないだろうか。さらに、近年は入込実人数と宿泊客数の伸びに差異があり、単純に入込人数の変化が宿泊人数はやや増加とリンクしていないと言える。一方、宿泊旅行の消費額が日帰りの消費額をはるかに上回っている。その状況に応じて日帰り旅行から宿泊旅行への転換や、宿泊日数の延伸等、新たな体験型メニュー造成による魅力づくり、県内の地域間連携や近隣府県との広域連携による周遊型観光を推進し、エリア内での滞在時間の延長を図ることが必要であると言える。

第二は、国籍・地域別外国人延べ宿泊客数の構成に基づき、2012年3月、観光立国実現の基本計画として推進されている新たな「観光立国推進基本計画」と「国際リゾートとっとりプラン（2013年4月策定）」によると、2012年から、戦略的に海外誘客を進めた効果が顕著であることが確認できた。それに、経済発展著しいアジア諸国は視野に入れ、市場ごと、アプローチの深度に合わせてグローバル化を持ち積極的な誘客に取り組むことが必要であると言える。

最後に、鳥取県で人気のある皆生温泉の訪日観光客数変化、季節の特性と今後の訪日観光客の推計結果に注目して分析・検討した。皆生温泉における訪日宿泊客数はまだ少ないが、国内市場の縮小が避けられない状況で、訪日客の動向も今後の大きな研究課題といえる。その温泉地の月別の宿泊数から動向を探ってみると、海水浴シーズン、秋の行楽と蟹のシーズンを迎える、それぞれ、7月後半から8月と10月後半から11月の集客力は高いものの、そのほかの月では、連休時以外には集客が落ち込む傾向があることも確認することができた。さらに、今後の訪日観光客の推計結果より、訪日観光客の延べ宿泊旅行者数及び延べ宿泊数が大幅に増加傾向にあり、この予想を踏まえ、人気のある大都市は勿論、鳥取県の魅力のある皆生温泉にも良いチャンスを迎えると思われる。

今後、皆生温泉における宿泊施設及び訪日観光客の入室状況に基づき、鳥取県西部の観光振興がどのような変化しているかなどについて検討することができる。これらの諸点については、今後の課題としたい。

○参考文献・サイト

- 観光庁持続可能な観光推進本部 2019『観光庁持続可能な観光推進本部 2019 持続可能な観光先進国に向けて』
<https://www.mlit.go.jp/common/001293012.pdf> (最終閲覧日 2021. 12. 31)
- 日本政府観光局 2021『日本政府観光局 2003年～2021年 国籍/月別訪日外客数』、日本政府観光局月別・年別統計データ (訪日外国人・出国日本人) (最終閲覧日 2021. 12. 31)
https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/since2003_visitor_arrivals.pdf
- リサーチセンター 2018『リサーチセンター 2018 2030年観光の未来需要予測研究』、リサーチセンター (最終閲覧日 2021. 12. 31)
<https://jrc.jalan.net/wp-content/uploads/2018/05/researches061.pdf>
- 津田夕梨子・十代田朗・津々見崇 2011. 雑誌『旅』にみる温泉地に対するイメージの変遷に関する研究. 都市計画論文集 46 (3) : 607-612
- 山村順次 1980. 日本温泉観光地の入湯客の地域的・季節的特性. 地理科学 33 : 1-13
- 福井一喜 2015. 群馬県草津温泉の宿泊業におけるインターネット利用の動態-宿泊施設の経営戦略に着目して-. 地理学評論 88 (6) : 607-622
- 鶴田英一 2000. ホテルの立地展開と稼働率. 経済地理学年報 46 (4) : 58-72
- 宮城博文 2015. 観光地におけるホスピタリティ産業の発展に関する一考察 - 沖縄県那覇市の事例を中心に. 観光学評論 3 (1) : 49-61
- 小林良樹・十代田朗・津々見崇 2019. 地方都市の中心市街地活性化基本計画にみる観光の活用に関する研究. 都市計画論文集 54 (3) : 1028-1034

- ⁱ 観光庁持続可能な観光推進本部 2019『観光庁持続可能な観光推進本部 2019 持続可能な観光先進国に向けて』、観光庁持続可能な観光推進本部、p 3。
- ⁱⁱ 日本政府観光局 2021『日本政府観光局 2003年～2021年 国籍/月別訪日外客数』、日本政府観光局月別・年別統計データ (訪日外国人・出国日本人)、p 3、p 4、p 6。
- ⁱⁱⁱ リサーチセンター 2018『リサーチセンター 2018 2030年観光の未来需要予測研究』、リサーチセンター、p 7
- ^{iv} 前掲 i、p 12、p 24

